

# 博士論文（要約）

中山道宿駅の都市史的研究 一坂本宿および妻籠宿の宿駅の変容と村落空間構造

大野 謙三

## 1. はじめに

### 研究の概要

本稿は近世宿場町を研究の対象とするものである。近世宿場町という空間の実相に迫るため、本稿の主な論点は以下の通りである。

- 1) 江戸期を通しての宿駅空間の変容。
- 2) 宿駅屋敷地割と社会との関係性。
- 3) 宿駅空間とその背後に控える農業空間との関係性。

さて、上記論点を、各々一言ずつ補強しておこう。既往宿場町研究においては、研究対象宿駅の江戸期の 2 つの年次の家屋あるいは町並の状況を比較する研究が行われる。しかしながら、江戸期を通してのそれらの変容を考察することは行われていない (1 項)。次に、近世城下町の屋敷地割の社会との関係性について、「間口は(中略)領主が町屋敷所有者に課す役負担の基準であり、奥行が一定であることから実際には所有者の階層関係ないし経済力を表すことになる。」という、宿駅屋敷地割における階層関係ないし経済力とは如何なる実相なのか (2 項)。最後に、中山道宿場町では、一部の城下町伝馬町をのぞいて、宿駅の背後に農業空間が広がっている。宿駅とこの農業空間の関係性は如何なるものなのであろうか。

研究方法については、大きな分類としては、現地調査による研究ではなく、文書および宿絵図等絵図の考察に基づく研究方法の範疇に属する。

### 既往研究と研究の意義

宿場町は江戸期の代表的な都市類型の一つである。しかしながら、都市史研究という学術研究として改めて振り返ると多くを確認できない。宿場町は戸数規模が小さく、三都・城下町とは戸数規模の次元が異なる。その意味で研究成果の及ぼす外形上の影響もおのずと異なる。一方、宿場町は近世日本で全国に張り巡らされた街道を支える普遍的集落類型である。近世日本の在郷町についての認識を深めるためにも、史料の許す限り、宿場町についての研究を進めるべきと考える。

### 坂本宿と妻籠宿

本稿において考察の対象とする宿場町の範囲を限定すれば、在郷集落としての農業生産活動を行いながら宿駅機能を担う中山道宿場町、家数でいえば、中規模から小規模宿場町を対象とし、以下に示す中山道宿駅 2 事例を主な舞台として研究を進めるものである。

上州坂本宿：江戸前期に宿立てされた坂本宿の江戸後期から明治初頭の宿駅屋敷地割の変容をたどることにより、江戸後期の町割および地割の特徴を明らかにし、伝馬役等宿駅役務との関係性を論じる。さらに、明治初頭の地租改正図から宿駅空間と農業空間の関係性を明らかにする。なお、宿村大概帳における家数は 162 軒である。

木曾妻籠宿：南木曾町誌では近世宿立て説をとるが、宿駅の町割地割形状からはいかにも江戸前期の計画的町割方式以前の宿立てを想起させる。江戸前期から明治初頭の史料を見出すことができる妻籠宿を対象とし、宿駅屋敷地割の変容を緻密にたどることにより、江戸期を通しての宿駅屋敷地割の変容を明らかにする。なお、享保 9 年検地帳記載の屋敷および

田畑面積から当該年の宿駅空間と農業空間の関係性を明らかにする。なお、宿村大概帳における家数は83軒である。

以下に、坂本宿および妻籠宿の考察過程のうち、特徴的なものを掲げる。

## 2. 坂本宿の宿駅屋敷地割

### 江戸後期・末期の宿駅屋敷地割

近世後期の宿絵図を考察すると、坂本の宿駅屋敷地割については限定的な数種類の屋敷地割で構成されていることがわかる。その内、間口3間半、7間、14間の3種類の「基本地割」がある。それらの間口は、倍、倍々の「規則性」を有する。屋敷総数160から161の内、「基本地割」の屋敷数は153から156屋敷地であり、率で示せば9割5分を超える。なお、基本地割の間口7間および3間半は、一定範囲の間口を指す「呼び間口」ではなく実数値に近いものである（「規格性」）。また、視野を宿駅の外に広げれば宿駅屋敷と屋敷付畑は7間モジュールで一体的に地割されており、そのサブシステムとして屋敷は3間半モジュールで地割されている。

『諸御用留』および「明細書上帳」を考察すると、屋敷地割七間間口を壱軒、同三間半間口を半軒と呼称し、各々伝馬役の馬一匹役、歩行一人役を務めるとされている。□また、問屋の屋敷間口は14間である。□すなわち、宿駅屋敷地割（間口）の社会的意味については、近世後期において、基本地割（間口）が伝馬役の賦課種別および問屋の宿駅役務等と対応している。

### 屋敷地割と社会の関係性、その規則性と規格性

坂本宿は、屋敷地割が伝馬役等宿駅役務等と見事に対応している。新規に集落社会を結成し、宿立て（宿駅建設）した宿駅であるから、屋敷地割（というハードシステム）に当該集落社会構造（ソフトシステム）が直接に反映されている。一軒役・半軒役という近世農村集落の社会構造がそのまま、一軒屋・半軒屋という空間構造となっている。

屋敷地割面積の規則性は当該宿駅社会構造の表れでもある。坂本宿は江戸前期に周辺小集落を併せて宿建てした宿である。名主と一般村民の屋敷面積格差が2対1であることは、中世からの在郷集落社会を継承した宿駅と比較すると格差が圧倒的に少ない。計画都市坂本の計画理念を表していると考えられる。

坂本宿の屋敷地割の特徴は、地割の「規格性」と、ほとんどの地割が3間半の倍数であるという「規則性」の二点にある。

## 3. 妻籠宿宿駅の変容

### 江戸期を通しての宿駅町方屋敷地割の変容—寛永11～嘉永6年間の宿駅町方—

町方全体として36地割から63地割と屋敷数は倍増する。その場所的内訳は北部20増、宿駅南部杵形廻り7増、宿駅中心部は1増1減で小計ゼロである。この1増は村役人の屋敷の分筆によるものであり、1減は寛永19年文書にいう別の村役人隠居の裏屋敷の減分である。

町方北部における変容詳細について述べれば、年次（例えば、享保9年）の前年次（貞享3年）の宿駅町方端部に隣接する外部区間に零細間口の屋敷地割が新設される。家屋は借屋と推定される。一方、前年次の屋敷新設完了区間は、借屋から本役級村民居屋敷と借屋となっている。また、町方西側南端部においては、一筆の分筆と理解するよりは、同一所持者の地割の再編整備（小規模化）と理解すべきものの多い。

変容の詳細全てを掲げることはできない、貞享3年控屋敷の享保9年への変容を見ておこう。貞享3年控屋敷は13を数える。控屋敷のママが7、本役級村民の居屋敷に成が6である。これに新たに、屋敷新設により控屋敷6が加わり、享保9年の控屋敷は13となる。

江戸期を通しての宿駅町方の屋敷地割の変容は、宿駅の「外延的拡大」といえる。一方、外延的拡大という選択肢を採れない都市・集落においては「内向的高密度化」、分筆による屋敷増という手法により宿駅の変容を行われる。

#### 4. まとめ

##### 宿駅屋敷地割の変容

信州木曾の妻籠宿における宿駅屋敷地割の変容についての考察からは、江戸期を通しての屋敷地割の増加は、宿駅町方端部に隣接する外部区間に零細間口の地割が新設されることによりなされる（外延的拡大）。なお、妻籠宿の宿駅中心部は、本役級村民の居屋敷の建ち並ぶ地区であるが、そこでは江戸中期から末期にかけて、屋敷の分筆が確認されるのは一筆のみである。江戸中期に没落した村役人の屋敷分筆であり、例外的事例ともいえる。

##### 宿駅屋敷地割の意味

江戸前期の在郷集落においては集落社会には明確な社会階層があり、宿駅屋敷地割の屋敷所持・不所持、大きさ・位置はこれに規定されている。社会階層とは、名主（級村民）、村役人（級村民）、本役（級村民）、従属層である。

江戸後期の中山道宿駅では、宿駅屋敷地割（間口）に関連付けて、伝馬役が賦課される事例がある。これは、そもそも江戸前期、本役（級村民、一軒役）に割り振られた伝馬役が、その後の宿駅内従属層の自立（例えば、半軒役と呼ばれる）に伴い、宿駅屋敷地割を所持し、それに関連づけて集落内諸賦役を担うことになった痕跡である。

坂本宿は、江戸後期においても集落社会階層構成が直接に屋敷地割に表現され、それを介して伝馬役負担が表現された事例といえる。妻籠宿では、江戸中期前半の伝馬役負担方式しか明らかではないが、家数が少ないことにより、本役が伝馬役（馬役と歩行役の両役）を負担するという規範であったと推定される。

##### 在郷町としての村落空間構造

##### 集落枝集落構造

坂本宿、妻籠宿の2事例は、何れも広大な行政域の中に、当該面積の数%に相当する耕作地面積を有する集落である。両宿場町とも、宿駅集落の他、2から3の小集落（枝集落）を有する。両宿の枝集落空間構造は、坂本では2分構造、妻籠では2層構造といえる。居屋敷、田畑の所持の仕方を考察すると、坂本では、宿駅と小集落の間に相互に所持関係がなく、2分した関係といえる。妻籠では宿駅居屋敷所持者は村内全域に田畑を所持している。一方、小集落居屋敷所持者は当該小集落の属する方面内のみ田畑を所持している。このことを2層構造と呼ぶ。両宿のこの違いは、両宿の宿形成過程を反映していると推測される。

##### 在郷町としての村落空間構造

両宿共、宿駅は家屋が連担して建ち並ぶ町的景観を示し、宿駅背後には田畑山林により構成される農的景観が広がっている。すなわち、総体としての町は宿駅業務および生業を行うとともに、農的生産を行っている。また、一人一人の宿駅屋敷所持者（坂本では全員、妻籠ではほとんどの者）が、田畑を所持している。そして、屋敷と耕作地の所持関係は比例関係が認められ、集落社会は村落社会的体質を示している。